
俺の幻想郷日記

インテリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幻想郷日記

【Nコード】

N3746I

【作者名】

インテリア

【あらすじ】

ある夏休みを控えた日、俺は何故か幻想入りしてしまう。

そう、これは俺が体験した不思議なことを記したものだ……。

初投稿なのでいたらない部分があると思いますがどうぞよろしくお願ひします。

第0章 プロローグ（前書き）

これは東方 project の二次創作です。

そついうのが苦手な人は「戻る」を押してください。

第0章〜プロローグ〜

人生、どんな事が起きるかわかったもんじゃない。

俺が今から記すのはそんな事をしみじみと実感させられた、とある日に起きたある事件のことだ。

その事件は俺の今まで過ごしてきた日常、いや俺の今まで住んできた世界をも変えてしまうような出来事だった。

その事件をキツカケに俺はとある壮大な厄介事に巻き込まれてしまっただが……どこから話そうか。

まずは……そうだな。すべてののはじまりとなる夏休み前日から記すとするか……。

そう、あれは俺が高校一年の時の……何時もと変わらないはずだった日のことだ。

第0章「プロローグ」(後書き)

11月5日編集しました。

第一章　幻想入り　夏休み前日のこと（前書き）

前回投稿したのがとてつもなく短かったですがなるべく長くするよう努力します。

第一章　幻想入り　夏休み前日のこと

「ただいま」

闇に染められた空の下俺は明かりのついてない家の中に入りながら俺は呟いた。

ちなみに今は夜だ。何時くらいと聞かれたら夏休み前日という日付なのにもう真つ暗といえば……だいたい分かるだろ？

何故こんな時間までいたかという……まあ、あれだ。これからいつ会つか分からない奴らと語らっていたらこんな時間になってしまった

……はい、反省してます。

と、いいつつも俺は1人暮らしだから関係ないんだけどな。

さっさと荷物を置いてリビングに行くとなんと明かりがついていた。

……おかしいな、朝電気消したよな。

まさか泥棒ッ！！っと思ったりしたがそんなわけないかと思ひ普通に入った。

たいした期待もせずに入っただ俺はそこにいる人物に少なからず驚かされた。

「……父さん、帰ってきてたの？」

そこにいたのは俺の父親だった。

普通の家庭はどうだか知らんが俺の父親はほとんど家にいない。というかそもそも家に住んでいない。

俺の父親はここより都会にある大学の教授をやっており、仕事の都合上向こうに住んでおりほとんどこっちに来ることはない。

ちなみに母親の方は俺が物心つくまえに死んでしまったようで俺はだいたい1人暮らしだ。

別に会ったことも無い母親に思い入れなど無いし、昔から家事なども1人でやってきたから困ることもない。

……話がそれたな。よって父さんがこっちに来るのはとてもめずら

しいのだ。

「めずらしいじゃん。こっちに来るなんて」

俺がそう聞くと父さんは、

「まあな、やっと最近暇をとることができてな。だから久々にちょっと戻ってきたんだ。あと、明日から父さんの住んでいる方に行くぞ」

と言った。

ああ…なるほどだからか。…ってちょっと待て!!

「明日ッ!」

明日って急すぎじゃないか!!

「そうだ。明日だ。向こうに必要な物はほとんど揃ってるから支度も特にいらんぞ」

「確かにそうだけど……」

そう。向こうの家には今いる家よりも高性能な物がたくさんあるのだ。

その点で不満はない。むしろ向こうに住みたいくらいだ。

「だからって急すぎない？」

とささやかに反対の意を込めて言うと父さんは、

「まあ、いろいろあつてこんな微妙なタイミングになってしまったがな。別に問題もないだろう。それとも何か用事でもあるのか？」と少し困ったような感じに言った。

…確かにこれといって用事も無いし、久々に向こうに行くのもいいかもな。

あ、夏休みの宿題を父さんに手伝ってもらつのもいいな……。

悩み悩んだ結果俺は行くことにした。

「そうか、よかった。なら急いで支度しなさい」

父さんはどこかほつとした感じに言った。

俺は適当に夕食を食べ、部屋に戻り支度をはじめた。

「とは言っても特に用意する物もないな……」

そう、向こうには大体の物はあるのでほぼ手ぶらでもいいのだ……

まあ、今回荷物になりそうなのは夏休みの宿題くらいか……。憎たらしい宿題共をバツクに詰め込み、風呂に入った後適当にネットの世界を駆け巡った後、俺は夢の中へと旅立った。

…まさか、もう既にこの事件に足を踏み入れているのを知らず…。

第一章 幻想入り 夏休み前日のこと（後書き）

今回は幻想入りしませんでした。が次回幻想入りするのでご安心を。
主人公の名前を出さないのはワザとです。
感想などがありましたらお伝えください。

第一章『幻想入り』襲ってくる『闇』（前書き）

やっと幻想入りする事ができました。

後、今回はある東方キャラとも会いますよ。

第一章く幻想入りく襲いくる『闇』

…人間とは自分の予想の出来ない事態に遭遇すると思考が一時的に停止するらしい。

例をあげるとすれば何かのレポートを作成してる時に飲み物をこぼした時とか。

早くレポートをどかし拭けばまだ奇跡的に無事かもしれないがやっちゃった時は呆然と眺めちまうだろ？

多分、そういう行動はその現実を受け入れたくない思いからきてるんだらうな。うんうん。

…すまん。前振りが長かったな。

つまり今俺はその事態に陥っており、どういう状況かということ、

「どこだ、ここ……」

見知らぬ森の中にいた。

(いや、待て待て待て待てッ！！)

え、何この急展開。いったいどのマンガですか？何なの。バカなの。死ぬの。

…いや、落ち着け。COOLになるんだ俺ッ！！

まずはこうなつた過程を思い出すんだッ！！

え〜と、夏休み前日に家に帰ったらいつもはいない父さんがいて、

次の日に父さんの方の家に行くことになり、支度をして眠り、起きたら森の中にいた。

はい、訳わかりません

大体、支度をして寝る 起きたら森の中にいる、に何故繋がるのか
が理解できない。

できる奴がいたらすぐに俺の所にこいッ！！そして今すぐ俺と代われッ！！

「い、今起きたことをありのまま話すぜ。夜、支度をして寝て起きてみたらなんと（ry）」

などと、小ネタをやり現実逃避をしていると、

「ん……あれは……」

人影らしきものを見つけた。

ちなみに周りは木ばかりで、今は夜らしく月明かりで多少周りが見えるくらいで周りの様子などとてもわかりにくいのが、その人影らしきものだけははっきりと見ることが出来た。

近寄って見てみるとどうやら少女のようだった。

全体的に黒い感じの服を着、金髪で、赤く大きいリボンを頭に付けた背丈が小さい女の子だ。

見るからに外人だったがこんなどこかも分からない場所にずっといるわけには行かないので話掛けようと更に近寄った。

そう、俺は少しテンパってたかもしれない。

知らない場所に飛ばされたせいで誰でも気付くようなことに気付かなかったのだから。

『普通の少女』がこんな真夜中の森に入るわけが無いということに……。

「ッ!!」

少女に近づこうとした時、とてつもない悪寒が体中に巡った。

今まで感じたことのない感覚に思わず足が止まる。

「ねえ……」

目の前の少女が腕を水平に横に上げながらゆっくりとこちらを向く。

俺は少女にとてつもない恐怖を抱いていた。何故かはわからない。しかし、俺の第六感が告げている。このままこの少女の近くにいたら、そう、俺は……

殺されるだろう。

「あなたは……」

少女が完全にこっちの方に体を向けようとしている。

(ヤバい、逃げなきゃ)

心ではそう必死そう思うが体は金縛りにでもなったかのように動かない。

遂に少女が体をこちらに向け、腕を水平に横に上げ、俺をしっかりと見つめてから言った。

「あなたは食べてもいい人間？それとも食べてはいけない人間？」その瞬間、俺は少女とは反対の方向へ全力で走った。

……ヤバい。あの少女は危険だ。少女の言っている意味はまったく分からないがあそこに居てはいけない。

俺は底知れぬ恐怖に怯えながら必死に走り、逃げる。しかし後ろからは

「フフフ……逃がさないのだー」

あの少女の意外と可愛らしい声が聞こえる。ハツとなり振り向くと空中を漂う黒い物体が迫ってくる。

それは一体どういうものかは分からない。…だが、それを言葉で表すなら、そう、『闇』のようだった。

その『闇』がだんだんと近づき、遂に追いつかれ、そして俺は……

「う、うわあああああああああッ!」

意識を失った。

第一章 幻想入り 襲ってくる『闇』（後書き）

はい、今回もとても短いですorz

分かると思いますがあの少女はもちろんルーミアです。

…ルーミアの口調ってこれであってましたっけ？

次回は他の東方キャラと出会う予定です。

いつ更新するかは作者の気まぐれなので温かく見守ってください。
感想などありましたらどうぞどしどし書いてください。

第一章〱幻想入り〱ようこそ、幻想郷へ（前書き）

どうも皆さんお久しぶりッスー!!

いや〱現実の方でテストやら勉強やらゲームやらで遅くなってしま
いましたorz

ま、まあとりあえず本文へどうぞー!!

第一章 幻想入りくようこそ、幻想郷へ

「はッ!！」

突然俺は目を覚ました。

ベッドにいたのでどうやら今まで寝ていたらしい。

「もしかして……夢、なのか」

思わず独り言を呟いてしまう。

…… そうだよな。夢でなければあんなもの出てこないよな……。

不気味な森、謎の少女、そして襲いくる闇。思い出すだけで寒気が蘇ってくる。

…… やめたやめた。いちいち幻に怯える必要はない。

あの悪夢を振り払うかのように頭を振り、さてそろそろ起きようかなと思いい体を起こした時、俺は今頃になって周りの異変に気がついた。

「どこだ……ここ?」

そう、自分の部屋にいるのだとずっと思っていたが見知らぬ場所……

…… 部屋にある薬だと思われる物やその場の雰囲気から、診療所? ……

…… のベッドにいた。

…… はて?なんでこんな所にいるのだろう。

まさかまだ夢の中にッ!と一瞬思うがさすがにそれはないだろう。

とりあえずベッドから出ようとするが……何故だろう、体がいつもと

違う感覚するし、さっき独り言を言った時も声に違和感があったし……

「風邪でも引いたかな……」

そう呟きながら何故か異様に重い体を動かそうとした時、

「あら、やっと起きたの?」

いきなり誰かに話しかけられた。

慌てて声がした方に顔を向けると……赤と青を基調とした服を着た銀髪の女性がいた。

しかもすげー美人。

俺があまりの出来事にポカーンとしているとその女性が心配そうに「大丈夫？どこか調子悪い所はあるかしら」などと近寄ってきたがあいにく俺は混乱状態で反応出来ずにいた。

…え、ナニコレ。いったいどういう状況ですか。

…何故か俺の友人が「それなんてエロゲ？ww」と爆笑してるシーンが思い浮かんできたがム力つくので想像の中で思いつき殴っておいた。ふうー……。

「って、それどころじゃねえええええええ」

突然叫んだ俺にびつくりしたのかちよつとヒキながらこつちをみる謎の美女。あ、やべえ。この人完全になんか可哀想な人を見る目になってるよ。

「ゴホン、ゴホン。えーつとスミマセンがあなたは……。」
気を取り直して目の前の女性に尋ねてみる。

…とりあえず俺の知り合いリストにこんな銀髪美人はいないはずだ。目の前の女性は俺がそう尋ねると優しく微笑みながら

「私は八意永琳、医者よ。そしてここは永遠亭よ」と言った。

…またなんか珍しい名前の人だな〜っと思っていると、ある点に疑問を抱いた。

(永遠亭ってなんだ？)

俺の住んでいる地域にそんな場所は知らない。そもそもここらへんの地域は診療所すらあまり無いのだ。

目の前にいる永琳さん(八意さんだと言いくいのでこう呼ばせてもらう)は俺の困惑した様子を見て俺がその場所に心あたりが無いことに気がついたのか、少し残念そうな顔をして

「あら、知らない？

迷いの竹林の奥にあるのだけれど……うーん、やっぱり人里ではあまり知られて無いのかしら。

一応人里にも薬を売りに行ってるんだけどね……やっぱり竹林の中

じゃ限度があるのかしら……」

などとブツブツ呟きはじめてしまった。

な、なんか勝手にマイワールドへと旅立ってしまったって非常に話しかけづらいが気になることがあったので勇気を出して話しかけてみた。

「あ、あの……迷いの竹林やら人里とはいっただい……？」

そう、永琳さんの話してるなかにちよくちよくそんな単語がでていた。

というか迷いの竹林って何だよ！！

どこのダンジョンだよ！！

んなもんあつてたまるか！！

俺が静かに脳内ツツコミをしながら尋ねると永琳さんはとても驚いた目でこちらを見てきた。

な、なんだ。俺変なこと言ったか。

永琳さんはどこか考え事をしているような素振りをしていると俺をなぜか確信のようなものを宿した目で見てきた。

「じゃああなたは人里の人間では無いのね？」

どこか自分の考えをゆっくり確かめるかのように彼女は聞いてくる。

「そうです。というかそもそも人里ってなんですか？」

さっきからそのことについて聞いているのだが永琳さんは「そう……

…」と呟くと俺に真剣な目を向けながら

「じゃあ……幻想郷、という言葉に心あたりはあるかしら？」

と言った。

もちろん俺の返事は『NO』だ。

どこかのテーマパークの名前だろうか……というか俺の質問について何の返答もしてないよなコノヤロウ。

俺が静かなる怒りを燃やしていると永琳さんが優しく、語りかけるように

「…今から言うことはとても信じられるものじゃないかもしれないけど、これは全て真実だから聞いて」

とやけにシリアスモード全開だったのでとりあえず黙って聞く事にした。

少女説明中……

まあ、俺が永琳さんから聞いた話は簡単に要約するところなる。

1 . ここは幻想郷という場所で俺が住んでいる世界とは違う所であり、妖怪や妖精、幽霊などの人々から忘れさられたものが行き着く場所であること。

2 . どのような理由で迷い込んだかは分からないが俺が幻想郷の妖怪の森と呼ばれる場所にいたこと。

3 . そこで俺が妖怪に襲われたときにたまたま仕事帰りの永琳さんに助けられたこと。

その他にもいろいろと話されたがだいたいこんな感じだと思う。

うん？そんな話を聞いてどうだったか？そりゃあもちろん感想は一つだろうよ……

ふざけんなッ！！

そんないきなり見ず知らずの女性にそんな電波話されて信じられるかアッ！！

だいたい何が異世界だとか妖怪妖精だよッ！！んなもんあつたら世界の法則乱れまくりじゃボケェ！！

…と怒鳴り散らしてやりたいがまるつきり信じられない話では無いのだ。

さつき窓の外を見してもらったが……そこに見えたのは

竹、竹、竹、竹。

どこまでも永遠に続く竹林だった。

この場所、永遠亭は迷いの竹林の中にあると説明されたが……なるほど、確かにこれは迷いそうだ。

更に幻想郷に住む者の中には特殊能力的なものを持つ人もいるようで……永琳さんは不老不死（蓬莱人、だっけ）らしく永琳さんがどこからか持ち出したナイフで自分の手首を切ったが……すぐに傷が治り元通りになってしまった。

これにはとても驚いた。実際自分の目の前で『有り得ない』ことが起きたからだ。

まさに信じられないようなことだが信じるしかあるまい。

だが俺にはまだどうしても疑問に思ってしまう所があった。

別に永琳さんを疑っているわけではない。俺は自分の想像を超えることが起きたとしてもそれを根本から否定するような患者ではない。

…もちろんそんな事起きてほしくなかったが…

あと、こんな考え方をしようになったのは父親の影響もあるかもしれない。

俺の父親は科学者であり、俺によく「科学者はまず、全てを疑わなければいけない。だが、どんなことが起きてもそれを否定してはいけない。」と言っていた。

簡単に言えば自分の想像を超えることが起きても、それを受け入れ、何故そうなったのかを探れッ！みたいなことを言いたいんだと思う。

…そのせいかな、おれがこんな疑い深く、慎重な性格になったせいなのも…

おっと、話がそれたな。

つまり何が言いたいかと言うと永琳さんが言う幻想郷云々の話は信じる。…できれば嘘であってほしいが。

問題はそこでは無く『どうして俺が来たのか』という点だ。

永琳さんの話によると俺の住んでいた世界からもたまに幻想郷に迷いこむ奴もいるようだ。

だが、それにしたって本当に稀らしくその時点でもう俺が体験したこと希少さが伺える。

次に俺が妖怪達の住む森に来てしまう。

この時点でおかしな所は無い。偶然で片付けられるだろう。問題はその後だ。

そこで俺がウロウロしていると妖怪に襲われそうになり、『たまたま仕事帰りだった永琳さんが助けてくれた』そこが怪しい。

何度も言うが永琳さんを疑っているわけじゃあ無い。

永琳さんからは嘘を言っている気配は無いし、嘘をつくメリットも無い。おれを助けたのも純粹な好意だろう。

そこに別に不自然な所は無い。…だがよく考えてみると明らかに都合が良すぎるのでは無いだろうか？

永琳さんが行っていた場所も普段ならあまり行かない（紅魔館、とか言ってたな）所らしい。

その帰り道に妖怪に襲われそうになった俺を助ける確率はどれくらいものだろうか。

…偶然、といえば確かにそれで片付けられる。だが、俺はそこにか裏があるような気がして仕方が無い。

とは言つても今の状況で何か出来るわけでも無いがな……。

「それで、あなたはその後どうするの？」

一人で長々と考え事をしていたせいでいつの間にか永琳さんが話しかけていた。

もちろん前後の話をまったく聞いていなかったたので何の事だかさっぱりわからん。

「えーと、すみません。どういうことでしょうか？」

「だからあなたは元の世界に戻るのかどうかよ」

話を聞いてなかった俺はそう聞き返してしまつたが、永琳さんは特に怒つた様子も無く答えてくれた。

もちろん俺としては帰れるものなら帰りたい。だがどうやってここに来たのか分からないのに帰れるのだろうか……。

俺がその旨を伝えると永琳さんは

「それなら大丈夫よ。ちゃんとあてはあるから……けど、今日はもう遅いから泊まっていきなさい。」

「え、いいんですか？」「もちろん。体に異常が無いかもしっかり調べたいしね」

…永琳さん、なんていい人なんだろう。こんな見ず知らずの男を助けていただいた上に泊めてくださるなんて……。

俺は柄にもなく永琳さんの優しさに感極まつてしまい、こんなことを言つてしまった。

「いや、本当にありがとうございます。妖怪に襲われている所を助けていただいた所から何からなにまで……！」

永琳さんはこの幻想郷の中では結構強い部類らしいがそれでも相手は妖怪である。俺の世界の人間なら腰を抜かして逃げるだろう。

…そういう事もあり感謝の気持ちも伝えたのだが、俺はこの後この事を後悔することになる。いや、どうせ気付く事になることになるのだが結局永琳さんにこの事を言われなくても変わらなかつたが

……。
とにかく、永琳さんが次に発したことは俺が今まで生きてきた中で一番俺に衝撃を与えるものだった……。

「ふふ。人として当然のことをしたまでよ。それに『可愛い女の子』が危ない目にあっていたら見捨てるなんてできないでしょ？」

……………へ？

俺は永琳さんが最初何を言っているのかわからなかった。
女の子？

永琳さんが話しているからもちろん永琳さんではない。
更にこの場には俺と永琳さんの二人しかおらず、話の流れ的に他に助けられた人はいないはず。

…じゃあいったい誰のことだろう。俺が永琳さんの言葉に戸惑っている
と永琳さんは微笑みながら

「ふふつ。照れなくてもいいのよ。それはもちろん……」

俺の方を指差し

「『あなた』のことよ」

と言った。

俺はその言葉に完全に思考がフリーズし、永琳さんの言ったことを

頭で考えるのに一分かかり、それを理解するのに三分必要とした。永琳さんの言ったことを理解した俺は部屋の隅に立ってかけてある大きな鏡の前まで急いで行き、そこに映っている『もの』をみた。

「えっ……はあああああああああッ……！」

そこに映っていたのはいつもの見慣れている自分ではなく、銀髪シヨートカットの『女の子』だった。

とある場所にて人々の話し声が聞こえる。

そこにいる人々は皆白衣を着ていてそこに所狭しと置いてある機械を操っている、一見からして『科学者』とわかる集団だ。

そして彼らの目的はその部屋にある巨大なモニターに映し出されている少年、いや『少年だったもの』を観察、調査することだ。

しかし今この部屋では喧騒に包まれている。

それもそのはず、今彼らが見ているモニターには自分達が予期していない状態となった観察対象が映っているからだ。

その予想もしなかった事態に陥ったせいで普段は落ち着きを保っている科学者達に混乱が訪れてしまっている。

「きよ、教授。いったいどうしまししょうか？」

科学者の一人が教授と呼ばれた男に話しかける。

その教授と呼ばれた男だけは周りが混乱に陥っている中で一人だけ静かにその様子を眺めている。

「…やはり観察対象に異常が起きたか……あの女の力は想像以上ということか……ふ、まあいい。」

教授は独り言をいうように呟くと目の前の男に

「安心しろ。この事は既に予想済みだ。そのために仕組んだ『バツクアップ』だ。そのまま調査を続けるよう他の研究員にも伝えてくれ」

と伝えモニターに目を戻した。

その男が仕事を果たすため自分から離れて行くのを横目で見ながら確認すると教授はだれにも気付かれないように呟いた。

「あの時の復讐を果たさせてもらうぞ、紫……」

俺は恐らく人生で最も俺に衝撃を与えた事態からなんとか落ち着きを取り戻し、今の状況について深く考察している。

ついさつき何か偉そうに自分の父親の名言とかを使ってしまったが前言撤回。

…さすがにこれは無いだろう。いきなり男が女になるなんて。

というか、これを認めてしまったら俺が今まで生きてきた人生全否定ですよ？

俺の奇行を見た永琳さんが「だ、大丈夫」と若干引き気味になりながら尋ねてくる……俺、何か悪いことしたかな、神よ。

俺は自分に次々降りかかる不幸に己の運命を心から呪った。

…もう何もかもなかったことにして眠ってしまいたい。そうだ、これは夢だ。夢という事にしちまおう。

俺が「は、はは、あははははは」と乾いた笑いをこぼしていると永琳さんがさらに引いた感じになってしまったので

「すみません……少し、一人にしてください」

と言ってベッドに潜り込んだ。

永琳さんは

「そ、そう。何かあったら呼んでね」

と言って部屋を去ろうとしたがふと、ドアの所に立ち止まり俺の方を向いた。

…いったいどうしたんだろう?と違って見ていると「そうそう言い忘れていたことがあったわ」と永琳さんは言い、俺に微笑みを浮かべ、こう言った。

「ようこそ、幻想郷へ」

第一章〜幻想入り〜ようこそ、幻想郷へ（後書き）

はい、どうも作者です。

今回はなかなか話を長く出来たと思うんですが……更新遅すぎたorz

今回は永琳を出してみました……キャラクターとかの口調とか難しいですね（汗

永琳の口調とかに違和感があったのは作者の力量不足です。すみませんorz

あと、今回は更新がものすごく遅れてしまいましたが一応完結させる気バリバリなので見捨て無いで見守ってくださいッ！！

一応今話で第一章は終わりです。

次の章にいく前にオリキャラ紹介をしたいと思います。

では、次話まで見捨てずに見守ってやってくださいッ！！マジで！！

閑話〱キャラクター紹介〱（前書き）

どうも、今回はキャラクター紹介です。

本編で補足しきれない所とかはこのような形で紹介していきたいと思えます。

では、本文へ。

閑話〱キャラクター紹介〱

この作品では各章の終わりにこの小説に出てくるオリキャラを紹介したいと思います。
それではどうぞー！！

・主人公（名前不明）

能力

・?????
・?????

スperlカード
なし

・詳細

今作品の主人公。

本当は第一章で名前がでるはずだったけど作者の力量不足により明かされなかった…スミマセンorz

能力などはまだ不明でスperlカードもまだ持っていない。

完璧な丸腰状態なので妖精相手にも余裕で負けますww
性格は冷静……にしたかったが、どうしてこうなった？

基本的に頭の回転がよく、運動神経もよく、家事全般から何から何までできる意外と万能キャラ。

基本一般常識をわきまえているが彼の友人の影響のせいでネットのことも多少知っている。

何故か幻想入りをした時に女体化してしまっている。

∴別に主人公が女になったことでR15的な展開は起きませんのでご了承ください。

実はルーミアに襲われたあの時点で女性になっていたがその時は超展開に頭がついていってないのと寝起きで頭があまり働いてないせいで気付かなかった。

若干無理あるなこれ（汗

女性になる前は黒髪で目の色も黒だったが女性となった今は銀髪シヨートカットの碧眼となっている。

自分が幻想入りしたことに不信感を抱いているがとりあえず今の彼の目標は元の世界に戻ることだ。

閑話〱キャラクター紹介〱(後書き)

短けエエええええええええええええええええ。

はい。というわけで今回はこれだけです。

オリキャラクター一人だけなのにキャラクター紹介とか……orz
次話からは第二章となります。

何故主人公は幻想郷へ行ってしまったのか……その理由が少しずつ
わかっていきます。

感想、ご意見などどしどし募集してます!!

それでは次回まで、ばいに。

第二章↳元の世界に戻るために↳帰るためには？（前書き）

皆さんお久しぶりです!!

この前感想で文字が読みにくいとあったので少し書き方を変えてみました。

たぶん前より見やすくなってると思います。

今回から第二章ですが前半は第一章のまとめなので読まなくてもいいです。

それでは本文へどうぞッ!!

第二章 元の世界に戻るために帰るためには？

目を開けるとそこには知らない天井が映った。

…すまん、ただなんとなく言ってみただけだ。

俺はベッドからのそのそと起き上がる。

目に映るのは見慣れた俺の部屋ではなく、まるで診療所のような部屋だった。

「はあ………」

思わず溜め息がでる。

目の前に映るそれらは昨日の出来事が現実であったことを確実に証明する物だからだ。

俺は視界の端に見えた鏡の前までこれまたのそのそと歩き、そこに映る『もの』を覗き込んだ。

「はあああああ………」

そこに映った『もの』をみて俺はまたもや溜め息をつき、ついであうなだれた。

…そう、そこに映っているのは銀髪ショートカットで碧眼の明らかに日本人ではない『少女』だった。

もちろん俺は純日本人の男だ。

髪も黒けりゃ目も黒い。

そんな一般日本人の筈の俺だが、なぜか知らんがこんな散々なこと

になっている。

「どうやら俺はここ、『幻想郷』についた時からこの状態らしいが…
…いったい、何の因果のせいでこうなったのだろう。」

俺が鏡の前で憂いていると

「あら、いったい鏡の前でどうかしたのかしら？」

と横から声をかけられ、その声がした方へ向いた。

「あ、永琳さん。おはようございます」

その声の主はこの医師、八意永琳さん。

俺が妖怪に襲われそうになった時、助けてくれた上、この幻想郷のことについて教えてくれたり、宿無しの自分を泊めてくれたりするいい人だ。

…ちなみに彼女は自分が本来男だったことは伝えてない。

例え伝えたとしても変な混乱を招くだけだろうし、いろいろと面倒くさい事になるのが目に見えている。

それならば最初から『女性』として振る舞っていた方が遥かに楽、という訳である。

「いえ、特になんでもありません」

そっいつて鏡の前から移動する。

最初は口調も変えた方がいいのかと考えたが、見た目が完璧に女性なので必要無いと思い、結局変えなかった。

まあ、ぶつちやけめんどくさかったのである。

そんなわけで女性を演じる（と言ってもいつも通り過ごすのだが…）事になったわけだが……さて、これからどうした事か。とりあえずは元の世界に戻る方法を探すとするか。

ここに永住するつもり無いし。

そういえば永琳さんは元の世界に帰る方法を知ってるばいから聞いてみるか……

「永琳さん、ちょっといいですか？」

「あら、どうかしたの？」

近くにいた永琳さんが話しかけた俺の方まで来てから俺に問い返してくる

……律儀な人だな。

「いえ、大した事じゃ無いんですけど、昨日元の世界に帰る方法を知ってるみたいなのを言っていたのでそれについてお聞きしたくて」

「ああ、そのことね。」

ここで話すのをあれだから他の場所で話しましょう」

そう言っつて永琳さんは歩きだしたので俺もそのあとについて行った。

連れて行かれた場所は客間のような場所だった。

テーブルを挟んで俺と永琳さんは向かい合つように座る。

来て早々だがさっそく本題に入ることにした。

「それで、さっきの話なんですけど……」

「ふふ、そんなに焦らなくても大丈夫よ。

お茶でも飲んでゆっくり話しましょう。

あ、あと無理して敬語使わなくてもいいわよ。

私のことも呼び捨てで構わないし」

そういながら俺にお茶を出してくれる。

さすが永琳さん。気がきくなあ。

「それなら遠慮なく……それで帰るにはどうしたらいいんだ、永琳さん」

さすがに呼び捨てするのは躊躇われたので、どこか変な話し方になつてしまった。

永琳さんはそんな俺の話し方を聞いて、クスツと笑ったあと

「ええ、わかつたわ」

と言つて話し始めた。

「昨日話した博麗の巫女のこととは覚えてるかしら」

「ああ、確かこの幻想郷に張られている結界の管理をしてるんだっ

け？」

「その通りよ。とりあえずその博麗の巫女がいる『博麗神社』に行つて。」

あとは向こうがどうにかしてくれるわ」

「…そんな投げやりでいいのか？」

「大丈夫よ。実際、ここに来た外来人…：あなたのような人もそうやって帰つた人もいるから」

そう言つて永琳さんはどこからか紙とペンを取り出してきて、何かを書き始めた。

「博麗神社に行く方法だけど、残念ながら1日では行けない距離なのよ。」

だからあなたにはまず人里に行つてもらうわ」

「人里？行くのはいいけど、どうして人里なんか？」

「人里までだったら送つてあげることできるし、人里に知り合いがいるからそこから博麗神社までその人に案内させるわ。」

それに人里は妖怪に襲われないから安全ということもあるし」

妖怪には襲われたくないでしょ？つと永琳さんが聞きながら何かを書いている。

…おそらくその『知り合い』に向けてのものだろう。

「あとでその知り合いのことは話すわ。」

あ、そうそう………」

永琳さんはそこで何か思いだしたような素振りをし、俺の方をみて

「そつえばあなたの名前は？」

と聞いてきた。

そつえば教えてなかったなあ、と思いつつも俺はなんと答えようか悩んでいた。

ただ普通に本名を名乗ればいように思えるが思い出してほしい。俺の名前は普通に男性日本人にありがちな名前である。

だが、今の俺の姿はどうだ？

誰がどうみても『女性』と答えるだろう。

つまり、偽名を使わなければならない。

とは言ってもそつ簡単偽名が思いつくわけでもない、どうするか…。

…まあ、適当に俺がネット上で使っているペンネームをもじってそれっぽくさせればいいか…。

と、いうわけで

「俺の名前は『テリア』っていいです」

と答えた。

永琳さんは俺の顔をじーっとみた後

「珍しい名前ね」

と言って手紙を書く作業に戻った。

ふう、特に怪しまれずに済んだようだ……。

少し経って、手紙を書き終えたらしく永琳さんは

「そういえばずっとご飯食べてないでしょ？」

「一緒にどうかしら？」

と俺に尋ねてきた。

そういえば昨日はなんだかんだで何も食べなかったし、正直すごく腹がへっていたのでお言葉に甘えていただくことにした。

そこで俺は鈴仙とてゐ（本人達がそう呼んでくれと言ったから）と会い、この場にいない輝夜（こっちはなんとなく呼び捨て）のことを知った。

ちなみにそこで俺が気を失って3日間ずっと眠ったままだったことを知った。

…どつりで腹がへるわけだ。

食事を終えた俺はさて、何をしようかと悩んでいると永琳さんが

「そうそう、お風呂沸いたから入っていいわよ」

と言ってきた。

こつち（幻想郷）に来て一度も風呂に入っていないのでお言葉に甘え
たかったが……ここで問題点がひとつ……。

「替えの着替えが無いんですが……」

そう、いつの間にかここにとばされたせいで替えの服どころか何も
持っていない。

……ちなみに、今の服装は幻想郷に来る前に着ていた寝間着代わり
のジャージ姿だ。

その旨を伝えると永琳さんは不思議そうな顔をして

「あら、あなたが倒れてた所の近くにあった荷物、あなたの物じゃ
なかったの？

あなたの物だと思って持って帰ってしまったけど」

と言った。

あれ？俺が妖怪に襲われた時、そんな物あったっけ？

とりあえずその荷物を見してもらおうことにした。

永琳さんの案内のもと、その荷物のある場所まで行き、それを見た
俺は息を呑んだ……。

そこにあったのはひとつはアタッシユケースのような大きなカバン。

これは別にいい。

しかしその近くに置かれる物が問題だ。
それは……

自分の背丈近くまである、巨大な大剣だ。

自分が女性化してしまっているせいで本来の身長より小さくなっているが、それでも自分の頭ひとつ分小さいくらいの大ささだ。

永琳さんが隣で

「これを運び出すのは大変だったわ……」

と呟いているがそれはそうだろう……というか運べるほうがすごいと思う。

俺はその剣の近くに寄り、鞘から抜き出し剣の刀身を見ることにしてみた。

鞘から抜き出す時に持ってみたが予想以上に重くはなく、これなら普通に持ち運べそうだった。

…あれ、俺そんなに力持ちってわけじゃないのにな……

剣は両手持ちの西洋剣のようで、刀身には線？のようなものが刻まれている。

…しかし、なぜだろう。
なぜかそれがこの剣とはミスマッチのような感じがして違和感が拭えない…。

そうこの線のような模様を取ってつけたような感じに思えた。

俺がこの謎こ大剣を観察していると永琳さんが

「でもこの剣不思議なのよね。
なぜか刃がついてないのよ、それ」

と首を傾げながら言った。

確かに見てみるとこの剣には研いでないのか刃がついていなかった。
これではただの鉄の塊である。

とりあえずいろいろと謎のある剣だが鞘に戻して俺は永琳さんにお願ひした。

「すまないが永琳さん、ここにあるもの譲ってもらっていいかな」
カバンにはおそらくいろいろ入っているだろうし、大剣のほうは特に俺に剣の心得はないけど妖怪などがいるこの幻想郷では持つてて損することはないだろう。

永琳さんは

「ええ、いいわよ。

元々私のじゃないし」

とOKサインをくれて

「さ、用事がすんだならお風呂入っちゃいなさい」

と言ったのでカバンの中から服を見つけだし、お言葉に甘えて入ることにした。

ひさびさに風呂に入った俺はさっぱりした気分で風呂からでた。

…いくら女の体になったからってさすがに自分の体に興奮する変態では無いのでそこんところよろしく…。

そこであのカバンから取り出した服を着ようとしたが……中にあった服が青を基調とした中世時代の英国とかの貴族がきてそうなゲームとかでしか見なそうにないピシッとした服だった……。

…ぶつちやけ、なんのコスプレとか思う。まあ、それが男ものってというのが唯一の救いだな。

…女もののフリフリしたドレスとかだったら泣いてるな、俺…。

仕方なくそれを着てやることも無かったので永琳さん達の手伝いなどをしたり、博霊神社までの道のりを聞いたりしながらその日は過ぎました。

結局、何日か永遠亭に泊まり、今日やっと人里に行くことになった。

個人的にはなるべく早く人里に向かいたかったが永琳さんが

「3日間きを失っていたし、異常がないか調べたいから少し泊まっていたいなさい」

と仰ったので、様々な検査を受けている内に結構日が経ってしまった……。

…何かよくわからない検査もあったが、あれはいつたいなんだったのだろう……。

いろいろな事があったがこれでやっと帰る為のスタートラインに立つことができた。

ご丁寧に見送りに来てくれた永琳さんにお別れを告げ、人里までの案内人こと鈴仙と共に人里に向かい始めた。

「それでは永琳さん、今までお世話になりました。それでは行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい」

さて人里とはどんな所かな……。

「…しかし、あの少年はいつたい何者なのかしら」

月の頭脳こと八意永琳は人里に向かってどんどん遠くなる人間を見ていた。

彼女が疑問に思っていることは大きく分けて二つ。

一つ目は彼の宿している膨大な霊力。

検査に時間がかかったのはこの為だった。

調べてみると並みの妖怪なら圧倒できるような霊力を持っていたのである。

…本人は使えこなせてないみたいだが…。

だがその霊力の量の多さは人間が持てる範疇を越えているものだった。

その大妖怪にも匹敵しそうな霊力を持っているあの外来人は明らか

にイレギュラーだろう。

二つ目はあの『宵闇の妖怪』に襲われそうになった時、あの妖怪の能力である『闇』を打ち消したのである。

おそらくあの外来人の能力だろうがその『闇』を何の前触れも無く近づいただけで『消滅』させたのだ。

そのおかげであの妖怪に隙ができ、その間にあの外来人を助け出すことができたのだ。

…しかし、あの能力はいつたい何なのだろう。調べてみても本人がまだ能力の存在に気づいてないのか、調べることができなかった。

規格外の異能を持った人間……これは新たな『異変』の兆候なのかも知らない。

「なぜか偽名を使っていたのもきになるしね……」

もう既に見えなくなった外来人が行った方向を見据えながら呟く。

「まあ、私は怪我人がいたら治療を行うだけだわ」

そう答えながらどこか楽しそうに彼女は永遠亭へと戻っていく。

…「これから起るであろう『異変』をどうか楽しみにしてるかのよ
し」
…し

第二章↳元の世界に戻るために↳帰るためには？（後書き）

更新遅れてすみませんでしたッ！！

ここ最近リアルの方でテストやら何やらで忙しく、書くのが遅くなってしまうました。

次からは早く……したいのですが、また更新が遅れるかもしれせん。

しかし！！中途半端な状態で投げ出したりは決してしませんのでこれからもどうか見守ってやってください！！

それでは次話まで。ノシ

第二章↳元の世界に戻るために↳人里にて（前書き）

皆さんお久しぶりです!!

インテリアです!!

長らくお待たせしてしまいすみませんでした。

本来ならここまで長くなるはずではなかったのですが……いつも間にかこんなことにorz

ま、まあとりあえず本編をどうぞ!!

第二章 元の世界に戻るために 人里にて

永琳さんに見送られて永遠亭を出た俺は人里までの旅の相手である鈴仙と目的地につくまで様々なことを話しながら向かっていった。

「そういえば鈴仙。博麗の巫女ってどんな人？」

永琳さんからは異変解決のエキスパートとかしか聞いてないからな……。

まあ、巫女さんなんだからおしとやかで清楚な方なんだろう。

「ああ、あの巫女ですか？」

そうですね……めんどくさがりやで、ぐーたらしてて、賽銭箱の中がいつもからで、貧乏で、なぜか脇だけ露出して、だけどいざって時には頼りになる巫女ですよ」

……あれ、おかしいな。俺のイメージとは一つも合っていないんだが……。

ていうか、それでいいのか？

巫女って神聖な職業だろ？

さらにこの幻想郷を保つための結界も管理してる人だろ！？
いいのか！それで！？

「あ、テリアさん見えてきましたよ！」

俺が巫女というものはどうあるべきかを考えていると鈴仙が前方に指を向けたので、俺も顔を上げ前を向く。

「あそこか……」

俺の目線の先には小さな集落のようなものが見える。

あれが人里なのだろう。

「ここからならあと少しですね。早く行きましょう!」

どうやらいつの間にか立ち止まっていたらしく鈴仙の言葉により、また歩き始める。

……最終目的地にいる巫女に不安を感じられずにはいられなかったが、とりあえず第一目的地である人里へ向かった。

……主に鈴仙の服装について話し合いながら……。

「ここが人里か……」

鈴仙と別れたあと人里の中を適当に探索していた。

人里の様子は、古きよき日本！という言葉が似合いそうな昔の雰囲気
を漂わせ、それなりに賑わっている。

「この感じだと何時代ぐらいかな……江戸時代ぐらいか？」

永琳さんの話だと外の世界とは文明の発達にある程度差があると聞
いていたが……実際歩いてみて結構文明が離れていることがわかっ
た。

「さて、どこへ行けばいいんだっけ？」

と、俺は永琳さんに渡された人里の地図を見る。

それには人里の簡単な見取り図とこれから向かう場所が書いてある。

……つくづく永琳さんには頭が上がりそうに無いな。

「え〜っと、何々？」

寺子屋、に行けばいいのか。

てか、マジでいつの時代だよ……」

幻想郷では『学校』ではなく『寺子屋』と呼ばれている時代らしい。

とりあえずその寺子屋に向かうことにした。

……ちなみに今の俺の格好はこの時代に合いそうもない珍妙な格好
にその上背中に大剣を背負って大きな鞆など持っているから周りか
らは好奇の目が向けられている。

その視線から逃げるように少し急ぎながら歩くと恐らく寺子屋だと思われる場所に着いた。

「ここが、か……」

パツと見た感じだと近くにある民家とそれほど変わらないが、それなりの広さはあるようではそれほど窮屈では無さそうだ。

少し興味が湧き近くの窓から中を覗いてみると

「……ここが……であるから……が……であって……」

黒板の前に立っている女性が恐らく生徒である子供達に授業をしている姿が見えた。

俺は恐らく教師であるあの女性に用事があったが、授業を邪魔するのもあれなので終わるまでその様子を眺めていることにした。

……相変わらず周りの人達から向けられる好奇の目に耐えながら様子をつかっていると、授業を終えたと思われる子供達が一斉に飛び出してきた。

少しその場で待っているとお目当ての人物は遅れて出てきた。

「ん？見ない顔だな……。
私に何か用か？」

寺子屋の前ですつと待っていた俺を見つけたその人は凜々しさを感じさせる声で俺にそう言った。

目の前に立つその女性は青を基調とした服に銀髪。

それに頭に青い箱のような帽子を被っている、周りにいる村人とはどこか違うような感じのする人だ。

「あ、はい。俺はテリアという……こつちで言う外来人？です。
あの……八意永琳さんに言われて来たんですが……」

永琳さんには「寺子屋で教師をやっている人の所へ向かって。私の紹介と言えはわかるはずだわ」と言われたので少々不安ながらもそう尋ねてみた。

「ああ、君がその外来人か……紹介が遅れたな。
私は上白沢慧音だ。
寺子屋で教師をしている。よろしく」

と事情を知ってるらしく握手をしてきた。

……永琳さんにはいよいよ持ってどうにかして恩を返さなくてはならなくなつた。

握手をしたあと、慧音さんは体の向きを変え

「とりあえず事情は知っている。
まず私の家に来てくれ。そこでこれからどうするか話したいと思う。
それと、敬語で話さなくていいぞ。
あと私のことは慧音と呼んでくれ」

と歩き始めたので俺はそのあとを追って歩いた。

少し歩き、人里の外れの方に慧音の家があった。

「ただいま」と言っただけで慧音の家の中に入って行ってしまったので小声で「お邪魔します……」と言っただけで中に入った。

「ん？おかえり慧音……と、後ろの奴誰だ？」

慧音のあとをついてある部屋に入るとそこには、もんぺを着た白髪の所々にリボンを付けた少女がこちらを見て睨んできた。

「こら、妹紅！いきなり失礼じゃないか！！
すまない、テリア。あそこにいるのは藤原妹紅。
あんなやつだが根はいいやつだ。仲良くしてやってくれ」

慧音はそう言いながら謝ってくる。

一方、妹紅の方はというと「妹紅だ。よろしく」とこっちを見ずにそう言う。

反省してないようだ。

慧音は、ハァーっと溜め息を吐いて妹紅の側により

「なあ、妹紅。少し頼みがあるんだが……」

と言いかけると

「ああ、わかったわかった。

そこにいる奴を迷い竹林まで案内すればいいんだろ？

別に案内するのはいいが今日はもう遅いから明日でいいか？」

と妹紅早口にそう言った。

「いや、今回は『博麗神社』まで案内してくれないか？」

「はあ！？なんでそんな所まで案内しなきゃ行けねえんだよ！！」

慧音がそう言うのと妹紅は反論するように立ち上がりそう言った。

「実はそこにいる人物が外来人でな。

元の世界に戻る為にどうしても行きたいそうさ。

なあ、頼まれてくれないか？」

「ああ、そういうことか……」

慧音がそう説明すると妹紅はどこか納得した様子で座り直し、俺の方を見て

「本当は行きたかねえけど慧音の頼みだから引き受けてやる……！
だけど今日は遅いから明日でいいよな」

と言ったので「構わない」と答えた。

慧音が「すまないな……妹紅」と呟いたあと

「というわけで博麗神社まではそこにいる妹紅に案内してもらってくれ。

それと今日はこの後どうする？

良かったら今日は泊まって行かないか？」

と言った。

外を見るともう日が沈んでいた。

今日は寢床など確保していないのでお言葉に甘えて泊まっていくことにした。

夕飯をごちそうになったり、風呂を貸してもらったりしたあと、これまた貸してもらった布団で横になっている。

……明日にはもう幻想郷を出て、元の世界に戻れると思う。

元の世界に戻れることは嬉しいがここからいなくなるのは少し寂しいなと思いつながら、俺は眠りについた。

第二章↳元の世界に戻るために↳人里にて（後書き）

今回は1ヶ月の間小説を更新できなくてすみませんでしたorz
詳しくは活動報告に書いてありますが色々とおったせいで遅れてしましました。

遅れた割に話が進んでないという事実ww

恐らく早く投稿するのが無理なのでこれからもゆっくりペースの投稿になるかもしれません。

なので「ああ、そういうえばこんな小説あったなww」程度な感じにみてやってください。

一応予定では次話で第二章は終わりです。

主人公は元の世界に帰れるのでしょうか？

それではまた会う日までノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3746i/>

俺の幻想郷日記

2010年11月7日19時43分発行